



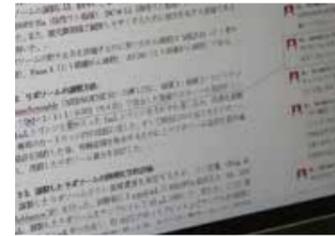
熱心に指導する石田竜弘先生。



小暮先生からの電話で急遽駆けつけた山田健一先生。



何度も足を運び、指導する田中直伸先生。



軽微な修正をすれば通るものもあれば、大がかりなものあり、この日論文を完成できたのは6割程度だった。

研究成果をまとめるための 作法と流儀を学ぶ 学術論文作成法

大学院 医歯薬学 薬学域 教授
小暮 健太郎 (こぐれけんたろう)

今回、取材に伺ったのは薬学部
の1年生の必修科目『学術論文作
成法』。論文の書き方だけではな
く、プレゼンテーションまで行う、
研究成果を「まとめる作業」に重
点を置いたカリキュラムです。

「薬学部の学生の多くは将来、
研究職として製薬会社などに就
職することを目標としています。
研究者はひたすら研究だけをし
ているのではなく、『Nature』や
『Science』といった様々な科学誌
や学術雑誌に論文を投稿し、研究
成果を世間に公表するため、論文
作成に時間を費やすことが多い。
そこで必要になる一通りを体験す
るのが、この授業です」という小
暮先生。

取材当日は前期に行った実験を
もとに学生たちが書いた論文を、
それぞれの研究室の先生が査読
し、先生たちからの指摘を修正。
最終原稿の作成を目指すという内
容でした。

8時40分から始まった授業は約
3時間連続で行われ、間に15分の

休憩がありますが修正に没頭し、
席を立つ学生はまばらです。査読
した先生によっても審査の仕方が
違い、有機化学系、生物系、医療
系、それぞれの作法や流儀も異な
るため、学生の中には指摘に戸惑
うことも。そのため小暮先生と共
に田良島先生、奥平先生、重永先
生もサポートを行い、ひとりひと
りの質問に丁寧に対応されていま
した。

また、査読した研究室の先生方
も駆けつけ、時間の許す限り、直
接指導。かなり細かい指摘がある
のも、先生方が愛情を持って見て
くれているからこそ。こうしたや
りとりを通じて研究室とのつなが
りもでき、研究への好奇心を培
うきっかけにもなっているそう。

最終的には全員
の論文を『創製
薬科学 学術論
文集』として1
冊にまとめる予
定。完成が楽し
みです。



先輩に続け

(独)製品評価技術基盤機構(NITE)
情報分析 未然防止対策室 室長

三浦 範大 (みうらのりお)

NITEをご存じですか？
ニュースで製品事故の再現映像
をご覧になったことはありません
か？もしかしたら、その映像の
片隅に製品評価技術基盤機構(N
ITE、ナイト)という文字があっ
たかも知れません。

私は、徳島大学工学部機械工学
科(当時)を経て1999年に徳
島大学大学院博士後期課程を修了
後、国家公務員としてNITEに
勤務しています。これまでの経験
から、技術系分野の行政の仕事に
ついて紹介致します。

NITEとは、くらしの安全を
守り、製品の信頼性を確保するた
めに、経済産業省が取り組む法執
行やイノベーション政策の技術支
援を行う国の機関です。バイオテ

クノロジー、化学物質管理、適合
性評価、製品安全、国際評価とい
う5つの業務分野に取り組んでい
ます。

私は、主に製品安全分野に携わ
り、皆様の身の回りにある製品で
起きた事故の調査やその再発防止
への取組、また、福祉用具などで
国際基準の作成に携わってきまし
た。

冒頭の再現映像は、事故調査で
判明した、誤った使い方で起きた
事故の再発防止のために、NITE
Eが注意喚起しているものです。

思いを一つにまとめることも 仕事です

ただ、製品安全分野のスペシャ
リストとして一つの道を歩んでき

たわけではありません。イノベー
ション政策を実装化する新規事業
の立ち上げや経営・広報のマネジ
メント業務にも携わってきました。

これまで全く関係が無いと思っ
ていたマネジメント業務では、所
属する組織、政府機関や産業界を
同じ方向にまとめていくことが仕
事です。

それぞれに強い思いがある中
で、多くの役員、政府関係者、
外部の技術者や経営者と議論を重
ね、信念を持って働きかけていく
ことは大変でしたが、徐々に一体
感が生まれることを実感できた、
やりがいのある仕事でした。

外の世界にコミットしよう！

技術系分野の行政職は、法や政

策の中で、産業支援や国民生活の
安全に携わる現場で活躍していま
す。また、国内に留まらず、他国
や国際機関と連携する機会も数多
くあります。

これらの活動を実効性のある取
組とするためには、多様な考え方
や思いの方と議論を積み重ねて、
方向性を決めていかななくてはな
りません。

そのためには、信念を抱きつつ
も柔軟な発想で対応していくこと
が重要です。

大学時代には、研究室、サーク
ルやアルバイト先のつながりやた
くさんの方と出会ってきました。
その関わりの中で、様々な経験を
重ねてきた社会人の方と議論でき
たことが多様な考え方に触れる機
会となり、相手の思いに対する受

け止め方や柔軟な発想を見いだす
きっかけになったと感謝していま
す。

在学生の皆様には、所属する研
究室やゼミだけに閉じこもらず
に、他学部・学科の先生やアルバ
イト先などで出会う社会人の方と
議論する機会を持つように心がけ
て欲しいと思います。

でも慣れないうちは、気恥ずか
しさもあるでしょうから、まずは、
近くの先生といろんなことを議論
してみませんか？

課題解決に至る柔軟な発想を身
につけるためには、自分の外の世
界にコミットして、様々な考え方
に触れてみるのが近道だと思い
ます。



大学院講座の様子。



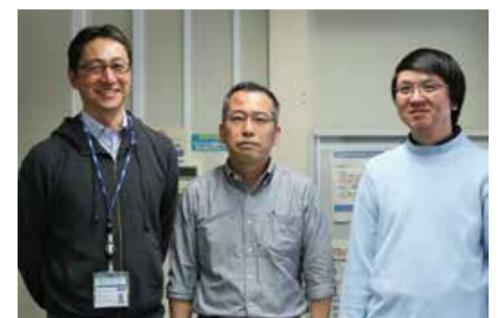
大学での講義風景。



実験教室。



論文の盗用を防ぐため専用ソフトを使い、重複率をチェック。全員問題なし！



この授業を担当するのは(左から)奥平桂一郎先生、小暮健太郎先生、重永章先生、田良島典子先生(写真下)。取材日は出張で不在だったが、異島優先生の5人。



気さくに質問に応じる田良島典子先生。